

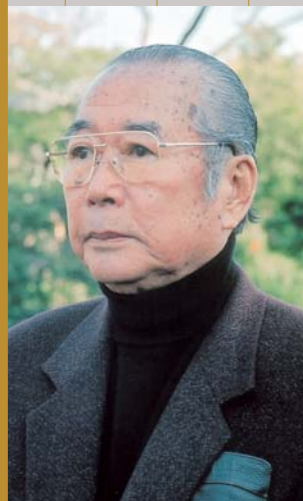
# 徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu

作家

童門冬二氏

Fuyuji Domon



経歴

本名・太田久行。昭和2(1927)年、東京生まれ。東京都庁に勤め、広報室長、企画調整局長、政策室長などを歴任して退職、作家活動に入る。歴史の中から現代に通ずるものを好んで書く。講演活動にも積極的。平成11年、勲三等瑞宝章受章。主な著書に「小説 上杉鷹山」「近江商人魂」「沢尻栄一 人間の礎」など多数。

## 家康の情と非情の部下管理法

徳川家康が今川家の人質として駿府(静岡市)にいたのは、天文十八(一五四九)年から永禄三(一五六〇)年の十二年間だ。家康が八歳から十九歳までの期間だ。桶狭間の合戦で今川義元が織田信長に討たれたあと、家康は独立し岡崎城に戻った。

駿府にいたころ家康は多くのことをまなんだ。今川氏の商業重視の都市経営や、今川家の師僧太原雪斎たいげんせつさいの儒学や兵法の指導などである。これらの指導・経験によって家康は庶民の存在をしり、政治理念として、民は水、治者は船の考えをうちたてた。かれの生涯にわたるリーダーシップや人心掌握は、この理念の実現のためにおこな

われた。家康は、「ひとりの人間がすべての能力をそなえることはありえない」と告げていた。したがって事をなすには、つねに「人間の能力と能力の加算か乗算」を考えた。つまり、チームワークだ。岡崎へ帰国後、かれは町奉行を設けた。民生重視の姿勢だ。

しかし奉行は単独制ではなかった。三人制だった。高力清長こうりきよなが、本多重次ほんだしげつぐ、天野康景あまのやすかげが任命された。町の人びとは、ホトケ高力・オニ作左おにさくざ(本多の通称)・どちへんなし(どっちでもない)天野康景とこの人事を批評した。つまり人情家の高力と厳正な本多と、その中間をいく天野という人事の組み合わせの妙を讃えたのである。



「臨濟寺」今川家の菩提寺で、家康公が人質時代に住職の太原雪斎に教えを受けたお寺。現在の本堂は、家康公が天正15(1587)年に再建。



「竹千代手習いの間」臨濟寺の部屋を駿府城巽櫓内に復元展示。



天井に描かれた龍。

私の一文字  
童門冬二さんが選ぶ  
徳川家康公を表現する一文字。

家康の人生観は「信義」を守り、そのための「信頼」をなによりも大事にしたことだと思います。



著書のご紹介

大御所家康の策謀

「大御所家康の策謀」日経ビジネス人文庫 730円(税込)

將軍職を秀忠に譲った家康は、駿府城を構え、大御所政治を展開。土木技術者、豪商、僧侶、学者、外国人をプレーンとして駿府に集め、豊臣色を一掃し、その後260年続く泰平の時代の基礎づくりに取り組む姿を描きます。

この組みあわせ人事は、その後幕府で制度化され幕末までつづく。このシステムは勤務を「か月交代(月番)」とすることで保たれた。こうすると、

- ・対象者が比較できる
- ・これによってそのポストにある者は反省し、「よし、つぎの当番のときはほかの者よりりっぱな実績をあげてやる」と奮起する

したがって、家康にすれば任命した部下の競争心・向上心も煽って、モラルアップ(やる気おこし)をはかることになる。月番は当然責任をあきらかにする。家康流の巧妙な分断支配だ。これはかれが部下に対して、

- ・仕事は大幅に委任する
- ・しかし任かされたしごとについては、わし(家康)とおなじ責任をもって

という「分権と責任のケジメ」を設定していたことを物語る。

あるとき天下人になった豊臣秀吉が、金にあかせてあつめた財宝を自慢し、広間にいる大名たちのひとりひとりに、「おぬしの宝物はなんだ?」ときいた。大名たちはそれぞれ家宝にしている品物を披露した。家康の番になった。家康は、「家風がつましいので財宝はありません。が、私の宝は私のためにいつでも生命を捨てる部下たちでございませう」と答えた。大名たちはあきれ、秀吉は大笑してその場の空気をなごやかにした。これをきいて家康の部下は感動したが、家康の部下へのきもちは温情だけではない。ここに書いたようなクールな非情さも、その底に据えられていたのだ。